

Capo. 3 ノーマル (En)

Capo. 1 オープンD

あすなろ

<sup>C</sup>何の心<sup>D</sup>ありて<sup>En</sup>明日は<sup>C</sup>ひん<sup>D</sup>と<sup>En</sup>つひに

<sup>G</sup>憧れの人のように<sup>D</sup>なりたい

<sup>Am</sup>何にも知ら<sup>Bn</sup>ないころは<sup>Am</sup>思<sup>D2</sup>っていたもの<sup>G</sup>

<sup>G</sup>人は誰<sup>D</sup>ひとり同じものでなく

<sup>Am</sup>たくさ<sup>Bn</sup>し生まる程<sup>Am</sup>遠<sup>D2</sup>うものになる<sup>G</sup>

<sup>C</sup>でよ<sup>D</sup>なること<sup>G</sup>や無理<sup>En</sup>なことは

<sup>C</sup>早く<sup>Am</sup>見切り<sup>D2</sup>をつ<sup>D2</sup>けて

<sup>C</sup>おけ<sup>D</sup>こ<sup>G</sup>けて<sup>En</sup>あきらめずに

<sup>C</sup>自分の個性<sup>Am</sup>を<sup>G</sup>活かして

ノーマル + オープンD

何の心'ありて明日はひんとつひに

あの人この人自分と比べて

「どうして自分は...」と思っていたもの

人は誰ひとり同じものでなく

良...ころ磨くほどに輝いてゆける

得意なこと役に立てること

ひとつでも多く増やして

この世に一つのなくてはならない

自分の存在求めて

# Capa 7 1-2, LG

## 砂時計

G F G C G F G C

<sup>Dm</sup> <sup>G</sup> <sup>C</sup> <sup>Am</sup> <sup>Dm</sup> <sup>G</sup> <sup>Am</sup> <sup>Am</sup>  
どこからか、聞えてきた どこからはおろかえし

<sup>Dm</sup> <sup>G</sup> <sup>Am</sup> <sup>F</sup> <sup>G</sup> <sup>Am</sup>  
それは引き返すには、通り過ぎたヒトに

<sup>A</sup> <sup>F</sup> <sup>G</sup> <sup>C</sup>  
たどってまた道をたどるのてなく

<sup>G</sup> <sup>F</sup> <sup>G</sup> <sup>C</sup>  
また違う目で、見直してゆきたい

<sup>C</sup> <sup>Dm</sup> <sup>G</sup> <sup>C</sup>  
おろかえしだけで、終わりでなく

<sup>C</sup> <sup>Dm</sup> <sup>G</sup> <sup>C</sup>  
また何度でも繰り返す

<sup>C</sup> <sup>Dm</sup> <sup>G</sup> <sup>C</sup>  
砂がなくなるまでは、終わりでなく

<sup>C</sup> <sup>Dm</sup> <sup>G</sup> <sup>C</sup>  
また何度でも繰り返す

誰かがつぶやいた 人生のおろかえし

それは儚い、響きしか残らぬ。うつす

過ぎ去った過去を振りかえるだけでなく

また違う目で、見つめ直して

おろかえしだけで、終わりでなく

また何度でも繰り返す

砂がなくなるまでは、終わりでなく

また何度でも繰り返す

## 感動して

感動して震えた時

求めるもの何だったのか

本当は何かしたかった

わからなかったものがわかる

時間を作って 居場所も作って

毎日寸寸ずつ 自分のペース崩さないうえ

短くても 狭くても

少なくても 構わな..

ひらめいて シビれた時

新しいものできる予感

本当にやりたいこと

気付かなかったものに出会える

直感を頼って 心に従って

できるもの少しでも 自らの気持ち高まるように

小さくても シンプルでも

自立をなくしても 構わな..



## 萩と月

飛び跳ねて回るウサギのように

こっ結び揺れる月明かりの下

はしゃいで踊り回る賑やかな集い

た子た子巡り合って その子も別れた

出会いはずっと一度だけ

今でも忘れたい

花咲く萩を月明かりが

青白く照らすように

屈託ないように映っている

おそらく何かを抱えていたようだ

余計なことば一切聞かなくてよかった

大切な出会いの綺麗にするために

出会いはずっと一度だけ

今でも忘れたい

花咲く萩を月明かりが

青白く照らすように

## 田舎道の幻

田舎道歩く傍ら 横切る小さな黒い影  
綺麗に鳴く声が近づき 向の姿かわかる

都会でも道の片隅 声だけは聞こえるけれど  
こんな風に見えること ほとんどないと思う

自分より高.. 網持って 勇ましく歩く男の子  
これは15年前なのか それとも50年前

金網の虫カゴの扉全開で 両手に持ち  
足元で羽根震やみ その先で待ち構える  
ふと見た幻 これは全て儚い夢の中  
あとにいたわが子はもしかしたら自分なのか

田舎道歩く傍ら 舗装された道がいつしか  
土だけの道になったところで ふと周り見渡す

二本の轍の間に伸びる草むらの中から  
勢いよく飛び移った先 後ろ足たたみ直す

河と土で汚れたタオル 首に巻く男の子  
これは15年前なのか それとも50年前

メダカ用の木櫃 わずかに土を入れて  
金網の虫カゴからの へと移し替える  
ふと見た幻 これは全て儚い夢の中  
あとにいたわが子はもしかしたら自分なのか

## かえりみて

En

物思う頃は 遠い昔

D

どうして あんなに 苦しかったのか

En

思い切ることも 出来なくて...

B

G

B<sub>2</sub>

流されるままに いつも逃げていた

En

D

B<sub>2</sub>

En

自分のことばかりで 何もわからず

En

D

B<sub>2</sub>

En

思いやることすらも 忘れていた

C

D

G

En

だいたい 何もかも わかった ような

C

D

En

因太、だいの今より

C

D

G

En

一挙一動が 気になるあの頃

C

D

En

その大切さかえりみて

物思う頃は 敏感で

どうして あんなに 悩んだのか

適当にふるまうこと できないで

うとまれることも あったのだろう

自分をよく見せる ことばかりで

気楽になることすらも 忘れていた

だいたい 何も 思われようと

気にしないだいの今より

恥じらい、プライド 感じてたあの頃

その大切さかえりみて